

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Ibrahim Ozturk
出身地：トルコ・トラブゾン
所属：マルマラ大学経済学部助教授
日本滞在：2004年10月～2005年2月

「ガイジン」からみた特別な日本

イブラヒム・オズトゥルク

日本は実に興味深い国だ。定住したり、頻繁に来日するガイジンにはありふれたことだと私は思うが、初めて日本に来るガイジンにとっては、驚きと喜び、時には悲しいことも多々あるのではないか。

初めての驚きは、飛行機から降り立ったときにあった。揃いの制服を着た係員があったかも軍隊のように入国者に接していたため、日本は軍事国家であったのか、あるいは最近クーデターがあったのかと勘違いしてしまうほどであった。しかし、入国審査を経て、都内への行き方を聞くため空港内の案内所に向かうまでには、そのような印象は無くなっていた。その案内所の女性係員は、長い間会っていない親戚に会うかのごとく、私を暖かく歓迎してくれ、私の気持ちまでも穏やかにしてくれたのだった。

来日する「初心者」のガイジンにとって、ここでは全てが複雑に思えてしまう。私が到着したJＲ新宿駅のような大きな駅ではなおさらだ。私はその駅の中で迷ってしまい、駅構内から外に出るまでに一時間近くかかった。ガイジンである私でさえ、外に出る方法を他のガイジンからも尋ねられるほど、この駅は複雑なのだ。だが、その後になって気づいたことだが、行き先には全て「ローマ字」が並記されているため、そ

の標識に従えば、実際は分かり易いのだ。

但しそれでも迷ったときは、ためらわずに周囲の女性に尋ねよう。ひよつとしたら、そのきれいな女性は自分が行こうとしていた方角を変え、たとえ時間がかかったとしても、彼女は行きたいところに連れて行ってくれるだろう。また、目的の電車に乗る場合、発車するまで彼女はそのホームで待ち続け、笑顔で「さようなら」とささ言ってくれるだろう。私が出会った女性は誠実で、私に心から親切にしてくれ、あたかも長い間知り合っていた人と別れるかのようであったため、私は悲しくなってしまった。

さて、時が経つにつれて、次のような事も発見した。日本では小さなコンビニに行くことをお勧めしたい。店員は入り口のドアにあるベルが鳴るのを聞くと、自分の任務を遂行するかののごとく、お辞儀をして「いらつしやいませ」という。但しその店で欲しいものが無く、店を出なければならぬ場合はどうだろうか。店員は「ありがとうございます」と言うだろう。ガイジンには奇妙に思うかもしれないが、これが日本の流儀なのだ。たとえ何も買わなくとも、来店自体がなんと感謝に「値する」のだ。

更に、日本の伝統を知るにはどのような

方法があるだろうか。日本式の温泉に入ってみてどうか。但し、あの「規則第一条」ほど不快に感じるものはない。「規則第一条」とは、素っ裸の状態です温泉に入らなければならぬことを指すのだ。だから日本式の温泉では、熱い湯のなかで至福の時を過ごすか、素っ裸であることを絶えず恥ずかしく感じなければならぬか、の二者択一しかガイジンには残されていない。

水着で入ろうとすれば、周囲の日本人は注意し、水着は不要だと言いつ張るだろう。文明国でこの規則を知ることが、ガイジンにとっては驚きだ。そのため、この境遇に我慢できるような祈りながら、Ya Sabih (トルコ語で我慢しろ！の意) とトルコ人が自分に言い聞かせるように、裸であることに不安を感じつつも、日本式の温泉を楽しむためには、長い時間が必要となってくる。

私はここで、アメリカ人教授がかつて次のように言ったことをふと思い出した。「日本をよく知るための三つとは、一、全てが新しく不思議であるけれども、それを好むこと。二、全てを嫌うこと。三、ガイジンが好き嫌いを感ずるものに対して、自然に感じられるようになるまでには何年もかかるが、辛抱すること」ということだ。

(前海外客員研究員／訳 榎山貴史)